

尾関周二著

『多元的共生社会が未来を開く』

(農林統計出版、二〇一五年、本体二〇〇〇円)

南 有 哲

現代日本の言論空間を頻繁に飛び交う言葉の一つである「共生」。その暖かくポジティブなイメージは、それほど程遠い世界を生きなければならぬわれわれにとって、あるべき社会の姿を示すものとして魅惑的に映るが、他方で差別や格差、弱者の蹂躪という現実を覆い隠すイチジクの葉に過ぎないのではないかとの疑念もまた掻き立てられる。私自身、ある研究報告の場において「多文化共生」なる言葉を用いた際、「そのような概念を肯定的に使

うこと自体が問題」との批判を受けた経験があるが、その意味でいわば「諸刃の剣」とも言えるこの「共生」なる概念が、来るべき社会を構想する際の基軸となるのだということをも、説得力を持って示しているのが本書であり、一読して私は大いに意を強くすることになった。

構成要素のなかに「欺瞞の暴露」すなわち共生が求められる集団の間の非対称性に留意し、弱者の連帯による「力関係の対等性」の追求、さらには「共生」を単なる理念や態度にとどめるのではなく、それを踏まえた上で「相互援助・協力から新たな共同を探る」という実践の提起が含まれていることとあり、それら諸点において氏の共生論は他の論者のそれと根本的に区別されることになる。さらに氏は、共生概念は多文化主義やコミュニティといった「人間—人間関係」のみならず「人間—自然関係」の次元にもかわるのだとし、目指すべきは「多元的共生社会」であると説く。

を媒介する労働の基本的な在り方を、自然収奪的な「工的なもの」から、生態系に依拠した「農的なもの」へ転換させることである。ここに氏がこれまで展開してきた「労働とコミュニケーション」についての唯物論的分析と、「農の哲学」が、共生論において統合

された時期」と「人が強力な捕食者となった時期」に区分した上で、この「正反對の立場への交代という人類史的経験」が「人間の多面的な感情」や「他者を理解する」という共生理念」を産み出したのではないかと、との興味深い提言を行っていることである。

されているのであるが、そこからさらに、氏はモノカルチャー化による地球環境破壊やグローバル化した食システムの脆弱さ、文化やコミュニティの危機といった課題の存在を指摘し、工業化された現代農業から環境保全型の持続可能な農業への転換の必要性を強く訴える。

その上で、氏は自然と人間との物質代謝の様式に基づく人類史の区分を提示する。最初の様式は狩猟採集のそれであり、このこと自体は常識的なのであるが、氏のユニークなところは進化人類学の知見を導入し、「人が捕食さ

れた時期」と「人が強力な捕食者となった時期」に区分した上で、この「正反對の立場への交代という人類史的経験」が「人間の多面的な感情」や「他者を理解する」という共生理念」を産み出したのではないかと、との興味深い提言を行っていることである。

狩猟採集という数百万年におよぶ物質代謝様式に対して、最初にもたらされた転換が、約二万年前の「農業革命」である。氏によればこのとき農業が開始され文明が始まったのではなく、そのことが階級を生み、都市が建設され国家が成立した。かくして平等であった人類の間に格差と支配—従属関係を引き起こしたのであるが、他方では文明の発達は普遍的世界観を産み出し、平等主義の精神レベルにおける復活・深化という成果をもたらした。

そして第二の転換が近代文明社会の成立である。科学革命によって自然哲

学から科学が分岐し、市場経済の全面化と国民国家および資本主義的な世界システムが成立したこの時代、エネルギーを化石燃料に依存することで、人類社会は自然生態系のサブシステムの位置から自立し、社会独自の論理で発展が可能であるかのような外見が生じたが、結果として生産力と自然生態系との矛盾が露呈し、自然と人間の物質代謝様式は深刻な危機に直面することになり、そのような近現代文明の問題性は三・一によって暴露されるに至った。しかし、他方で、近現代文明においてはフランス革命に象徴され社会主義運動が継承した平等主義の復活と深化もまた進行したのであり、共生理念の実現にむけての新たな展望が切り開かれたと氏は強調するのである。

最後に氏は、多元的共生社会に基づいた新たな文明の姿を構想する。それは「比較的小規模で高度に自立的かつ

自給的な共同体」がローカルからグローバルへ至る各レベルで重層化されるとともに、基礎単位の共同体同士が直接にグローバルな精神的・物質的交流を持つことが可能な「新たな世界システム」、成長主義から脱却した共生持続社会である。そこへ至るためには資本主義世界システムからの漸次的脱出が必要になるが、そのカギとなるのが自己確証的な労働の比率の拡大、そして農工共生さらには都市農村共生の実現であると説くのである。

本書から私が学んだことは多いが、その主たるものは以下の二点である。その第一は「多元的共生」なる言葉を批判的概念として彫琢することで、マルクス派が「共産主義」や「アソシエーション」として描いてきた未来社会像と基本的に一致する内容をもつものを、それらの観念では喚起し得ないような具体的なイメージをもって描き出すこ

とに成功したことである。現代社会批判として共同体的なものの重要性を説く議論は数多くあって、そのなかには一面的な近代批判を伴うものも少なくないのであるが、氏の立論にあっては近代的なもの的重要性とその発展的継承の意義について常に目配りがなされており、そこが氏の未来社会論にリアリティをもたらしていることも付言されるべきであろう。

第二には、「自然に対するコミュニケーショナル的態度」の重要性を明らかにすること、自然中心主義的な環境倫理思想やディープ・エコロジーの思想的意義を鮮明にしたことである。私は人間中心主義とその批判（＝自然中心主義）との間には、いわば論争的な相補性があって、そこに自然—人間関係に関わるイデオロギーとしての両思想の重要な存在意義があると思っており、共生の思想がこの対立を超越する

という氏の見地とはそこが異なるのであるが、「バイオフィリア」説等を踏まえた上での、氏による自然中心主義の発生根拠と合理的側面の指摘は、これら思想についてのより深い批判的理解の手がかりを与えてくれるものだと考える。

最後に、本書に限らず氏の著書を読む際にはいつも痛感させられるのであるが、氏が参照し紹介する学問的知見や学説の幅の広さは、まさに驚異的であり、しかもそのなかには、ごく最近刊行されたものも数多く含まれている。であるから本書は、環境問題や農業・食料問題について原理的に考察する必要性を感じている者にとっての手引書として格好のものであり、その点で学生諸君など若い人にぜひ薦めるべき書物であると言えよう。

（みなみありさと・三重短期大学・環境思想論）